

野々市町

押野夕十力遺跡

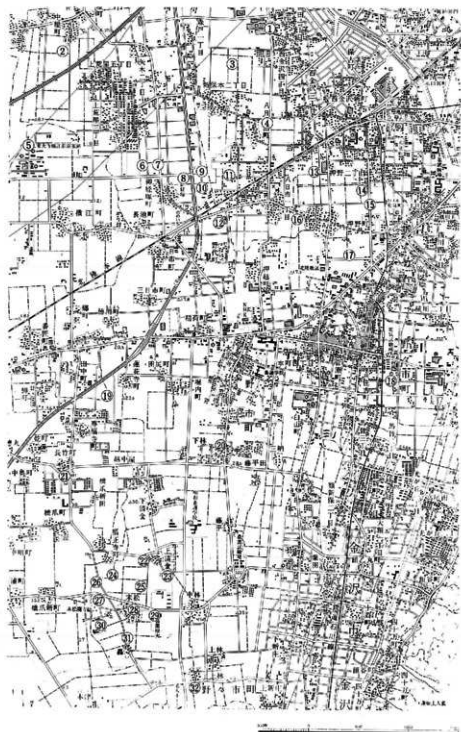
押野大塚遺跡



1986年

野々市町教育委員会

野々市町と近くのおもな遺跡



1. 古府ヒビタ遺跡(縄文)
2. 中屋遺跡 (縄文)
3. 新保本町チカモリ遺跡(縄文)
4. 八日市ヤスマル遺跡(古墳)
5. 東大寺横江荘在家跡(平安)
6. 御経塚シンアン遺跡(弥生)
7. 御経塚塚越遺跡(中世)
8. 御経塚遺跡 (縄文)
9. 御経塚ツカダ遺跡
(弥生～古墳)
10. 御経塚アスナロ遺跡
(奈良～平安)
11. 八日市B遺跡(奈良～平安)
12. 野代遺跡(縄文・古墳)
13. 押野西遺跡(弥生～古墳)
14. 押野大塚古墳
15. 押野大塚遺跡(縄文・弥生)
16. 上宮寺跡 (室町)
17. 押野クチナカ遺跡
(縄文・弥生・室町)
18. 富樫館跡 (平安～)
19. 田中ノダ遺跡(弥生)
20. 三林館跡(安土桃山)
21. 長竹遺跡(縄文～中世)
22. 清金アガトウ遺跡
(平安～中世)
23. 末松信濃館跡(中世)
24. 末松福正寺遺跡(古墳)
25. 末松B遺跡(弥生)
26. 末松ダイカン遺跡
(奈良～中世)
27. 末松廃寺跡(白鳳～鎌倉)
28. 末松古墳
29. 末松A・C遺跡(縄文・平安)
30. 大館館跡(平安～室町)
31. 法福寺跡
32. 上林遺跡(弥生・古墳)

遺跡の位置と近くのおもな遺跡

押野町は野々市町の北部にあり、手取川扇状地の北端部に位置しています。この押野町地内に押野タチナカ遺跡（以下、タチナカ遺跡）押野大塚遺跡（以下、大塚遺跡）が所在しています。

タチナカ遺跡は押野町より南東方向へ約400mをはかり、館野小学校の東及び南に位置しています。（館野小学校運動場も一部含んでいる。）「タチナカ」（タチノナカとも言う）の呼称は、この地に加賀守護富樫氏の一族で「押野殿」とも称される富樫家菩提の館があったことから現在に伝わっています。館は南北朝時代（約650年まえ）頃には建っていたと思われます。また、江戸時代にはこの館の土居が実測されこの地図の写しが現在に残っています。（押野村史）

タチナカ遺跡はこのように中世の遺跡と思われていましたが、土地区画整理事業に伴ない昭和53年に行なった遺跡の有無を調べる分布調査によって、新たに弥生時代後期の遺跡が存在していることがわかりました。

大塚遺跡は、押野町より東方へ約400m、北陸鉄道押野駅より北西方向へ約200mに位置しています。「オオツカ」という呼称はこの付近に「オオツカ」と呼ばれる古墳があったことからついています。明治時代の終り頃の耕地整理でこわれてしまいました。まわりが40間（約70m）の古墳が、旧米泉村との間にありました。大塚遺跡も土地区画整理事業の関係で発見されましたが、大塚古墳の古墳時代後期頃よりも古い弥生時代後期頃を中心とする遺跡です。

二つの遺跡ともできるだけ洪水を避けるため河と河の間にできた微高地（自然堤防）に立地しています。タチナカ遺跡は海拔約14m、大塚遺跡は海拔約12mの高さです。

ここで周辺における遺跡を見てみましょう。

野々市町は白山を源とする手取川によってつくられた扇状地の北部を占め、古くから開発が進みました。また扇状地端部は、縄文時代より弥生・古墳時代にかけて特に遺跡が密に分布しています。縄文時代中期に最初の人々が住みつけたのが古府ヒビタ遺跡①です。この後、縄文時代後・晩期に入ると御経塚遺跡⑧、新保本町チカモリ遺跡③、中屋遺跡②、野代遺跡⑩などが営まれました。採集活動によって食料を求めた縄文時代に代わって、稲作が取り入れられた弥生時代の最初の集落は上林遺跡です⑪。稲作が定着し弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、集落は爆発的に増加しました。この時期の遺跡としてタチナカ遺跡をはじめ、御経塚ツカダ遺跡⑨、押野西遺跡⑬、山中ノダ遺跡⑭などがあります。野々市町で確認されている遺跡の分布状況を見ると、北部においては縄文時代後・晩期～古墳時代前期の遺跡が多数をしめ、南部については、木松庵寺跡⑫を代表として、木松ダイカン遺跡⑮など律令時代の遺跡が所在しています。左の地図のように私たちのごく身近なところに遺跡がたくさんあります。これは現在わかっている遺跡ですが、上に埋まっているということから、まだ発見されてない遺跡もあると思われます。

また現在伝わっている地名（通称、小字名など）は、昔の人たちがなんらかの理由があつてつけたものです。地名の由来を調べることにより、地域の歴史について新しい事実が見つかるかもしれません。このように地名も重要な文化財です。

調査の経緯と経過

押野町地内は金沢都市計画にもとずき昭和45年7月1日に市街化区域として指定されました。地元では区画整理組合が発足し、昭和53年より区画街路の築造が北部の区域より始まりました。このとき大塚遺跡が発見され緊急発掘調査が行なわれています。(大塚遺跡第1次発掘調査)タチナカ遺跡は事前の分布調査をもとに昭和55年～56年初頭にかけて街路部分の緊急発掘調査(押野タチナカ遺跡第1次発掘調査)を行なっています。以後、大塚遺跡は昭和56年に第2次調査、昭和57年初頭に第3次調査が行なわれ、タチナカ遺跡は、第2次・第3次調査(昭和56年)、第4次・第5次調査(昭和57年)、第6次調査(昭和58年)、第7次調査(昭和59年)、第8次調査(昭和60年)と実施しています。(右図参照)

遺跡のあらまし

タチナカ遺跡



タチナカ遺跡近景(南東より、昭和57年)

タチナカ遺跡は3つの時期に分けられます。縄文時代後・晩期の頃、弥生時代中期～後期の頃、最後に加賀守護富樫氏の一族である『押野殿』の時期、この3つです。

縄文時代のものとして深鉢形の中屋式土器(晩期)と打製石斧・石鏃の石器が出土しています。



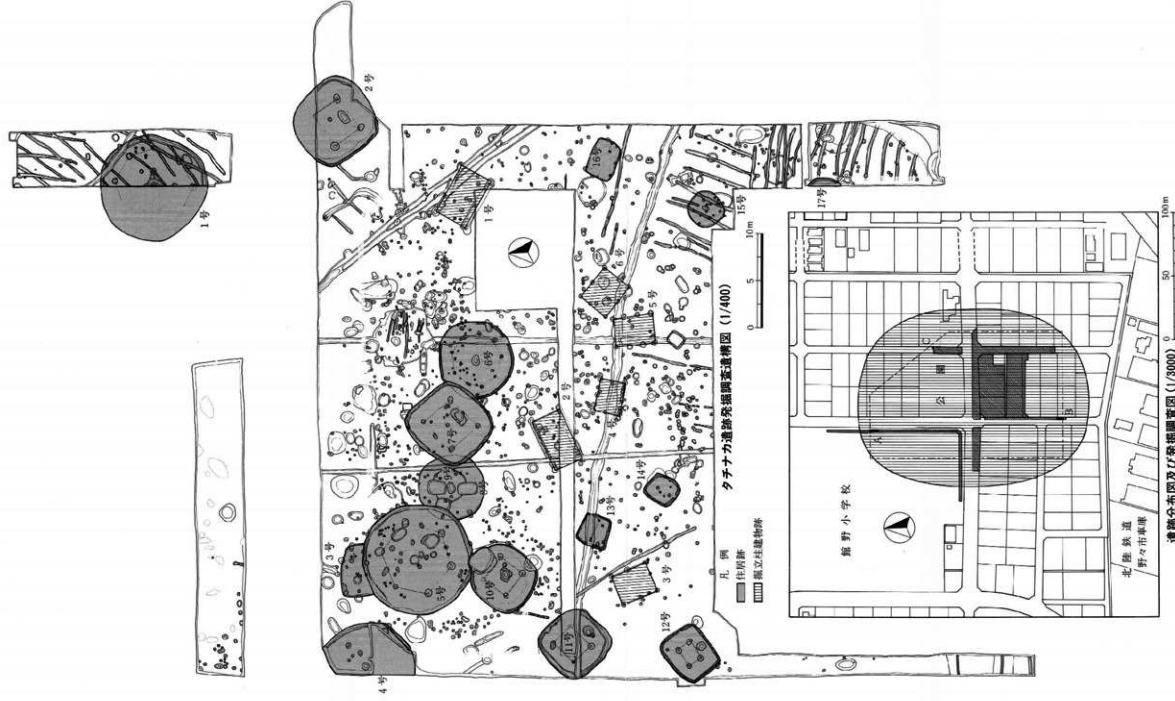
石 鏃

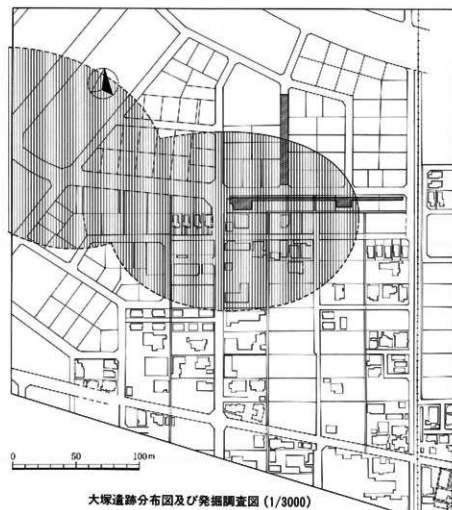
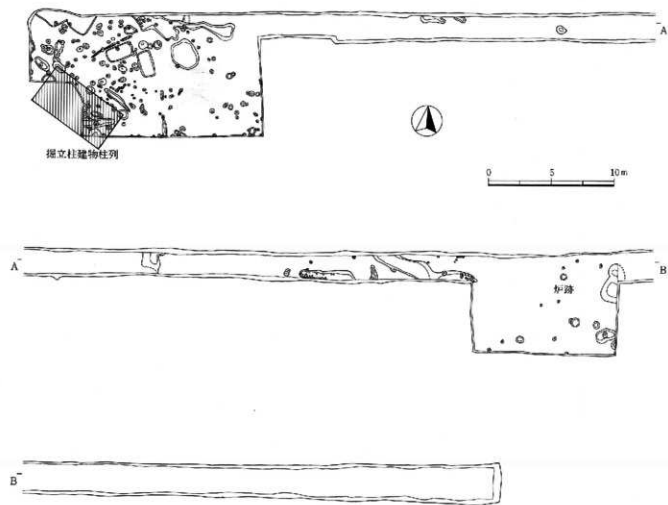
弓の矢先につけたものです。



打製石斧(左4点)、磨製石斧

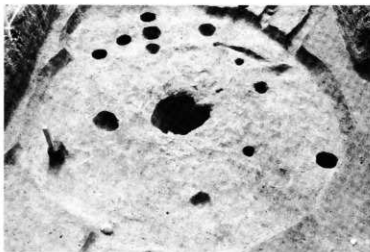
打製石斧は穴掘用の道具で磨製石斧は大工道具でしょう。





- 発掘調査区
- ▨ 大塚遺跡分布範囲
(-----は推定)

弥生時代中期には農耕生活を主体とする人々がこの地に定着し、堅穴式の住居が建てられました。発掘調査により弥生時代中期より終り頃にかけて計21棟の住居跡が見つかりました。これらの住居は同時に建てたものではなく時期がいくつかに分かれます。住居跡より当時の人々が使った土器が出土し、この土器の形などによってだいたいの時期がわかります。住居跡の時期はこれらの土器で分類すると、5つに分けることができました。これより、どの家とどの家が同時に建てていたのかを推定してみました。(1は中期、2～5は後期です)



15号住居跡 弥生時代中期と思われます。
円形の住居跡で直径は約4mです。

住居

人々の住まいは縄文時代からの堅穴式住居です。地面を深さ30～40cmに掘りくぼめ土間を作り、必要な数の支柱を立て骨組みをつくり、カヤやヨシなどで地面まで屋根を葺いた半地下式の住居です。住居は方形に掘られたものと円形に掘られたものがあります。方形の住居のほとんどは4本支柱で、円形のものには6本や9本など一定ではありません。例外はありますが一般的には方



7号住居跡 弥生時代の終り頃です。隅が丸くなった
方形の住居跡で大きさは8m×7.5mです。

古い時期より

- 1 8号または9号、
6号、15号
 - 2 1号、10号
 - 3 12号、18号
 - 4 3号、4号、11号、
16号、17号、20号、
 - 5 2号、5号、7号、
13号、14号、19号
- (18～20号は、第4次調査分であり図示はしてない。)

形の住居のほうが円形の住居よりは新しいと考えられます。タチナカ遺跡では円形の住居6棟、方形の住居は7棟です。(部分的な発掘で形わからない住居もあります。)タチナカ遺跡よりも少し新しい時期の御経塚ツカダ遺跡の住居はみな方形でした。屋根の葺き降ろし方は、円形の住居が円錐

形で、方形の住居は方錐形と考えられます。

住居は現在と同様家族のくつろぎの場であり生活の基本の場所でありましたが、食物の調理や暖をとるための炉を中心とした一部屋だけですから、使うことのできた空間はかなり限られたものだったことでしょう。

竪穴式住居は30～40㎡（10坪）位が普通の大きさと思われます。しかし直径10mを越え、面積が100㎡（30坪）程度の大きな円形の住居跡が見つっています。一般の家とは違い、村の集会場か、また共同作業場だったのかもしれませんが。



1号住居跡

弥生時代後期中頃の住居跡です。半分は検出ですが径約11.5mもある円形の大型住居です。主柱の穴が5個見られ、全部では9個が円形に並ぶでしょう。

5号住居跡

この住居跡も1号住居と同じような円形の大型住居です。直径は約11.7mあり、主柱の穴が6個円形に並んでいます。1号住居跡よりも新しい時代の住居で弥生時代後期の終わり頃のものです。

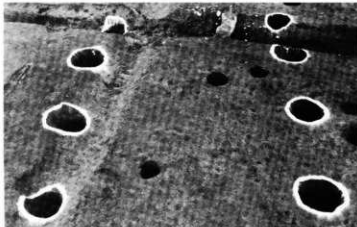


竪穴式住居復元想像図

円形住居の復元想像図です。前ページの15号住居跡がこの図のような住居と考えられます。

掘立柱建物跡

高床式と考えられる掘立柱建物跡が6棟見つかっています。遺構図のように柱穴が等間隔に長方形に並んでいます。柱穴は2通りの掘り方があります。1号、2号のように、まず細長く溝を掘り、さらにこの溝の中に柱穴を掘り柱を立て、石をつめてしっかり埋め戻す方法と、地面に柱が入る分だけ穴を掘り柱を立てる方法です。この掘立柱建物跡は、収穫した稲を納める重要な建物です。柱の間を1間と2間あるいは3間の長方形につくったものがほとんどです。湿気やネズミを防ぐため高床にした進んだ建物で、奈良東大寺の正倉院の建物と同じ構造のつくりです。稲は穂のまま貯蔵され必要なときに取りだして臼と杵で脱穀していました。

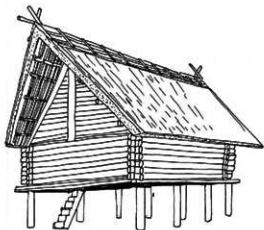


5号掘立柱建物跡

柱穴がたてに4個2列に並んでいます。たてを桁行、よこを梁間と呼んでおり、この建物は梁間1間、桁行3間となります。(石灰で囲まれている部分が柱穴です)

2号掘立柱建物跡

細長く溝を掘って柱を立てる方法をとっています。右側の溝がこれにあたり、溝のなかに柱穴が4個見つかりました。左側の部分は木杭の上にすこし見えています。梁間1間、桁行3間で5号掘立柱建物と同じです。



掘立柱建物跡(高床式)
復元想像図

梁間1間、桁行3間の建物の復元想像図です。写真の5号と2号掘立柱建物跡にはこのような倉庫が建っていたことでしょう。

土壇

死んだ人を土葬にして埋めたと思われる土壇(墓)が60ばかり、また用排水に使われたであろう清跡がいくつか見つかっています。人間にとって死は必然であります。弥生時代も現代と同様人間を墓に埋葬しています。土壇墓は最も一般的なもので、地面を楕円形や円形に掘りこんでつくった墓です。遺体は現代のように火葬にはせず墓の中に直に埋める土葬の方法をとっていました。

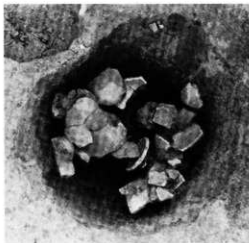


土壇墓

弥生人ではありません。実験として横になってみました。(身長約170cm)このようなかたちで埋葬されたことでしょう。



上と右は土器をいっしょに埋めた土壇です。



見つけた遺構(生活などの跡)のおもなものについて簡単に説明してきましたが、発掘調査をおこなった区域は、弥生時代の村のほぼ中心部で、このまわりにはまだ住居跡があることはまちがいありません。今後の調査によって村の大きさやかたち、また何人ぐらい住んでいたかがわかってくることでしょう。



クチナカ遺跡調査風景

昭和59年の第7次調査のようすです。右側は館野小学校です。

土器

住居跡や土坑などからたくさんの弥生式土器が出土しています。弥生式土器を用途で大別すれば、日用の土器（貯蔵用、煮炊用、食卓用）と儀式的土器に分かれます。貯蔵用として壺があげられます。液体など水ものの貯蔵に重点がおかれましたが、この中で酒や漬物なども作っていたことでしょう。米などを煮炊きする土器は甕です。煮炊したため外側が煤でよごれています。食卓用として高坏や鉢があります。どちらも食物を盛りつけたものと考えられます。高坏や壺は儀式や祭礼用があり神へのそなえ物を盛ったりしました。全面に赤彩した美しい高坏や壺があり、もっともよく飾られています。

土器のつくり方をみてみましょう。土器のほとんどは女の人によって作られたと考えられています。材料となる粘土は、どこにでもあふつうの粘土です。これに水を加えよくこねたものが

素材となります。ひびわれをふせいだり火にかけても割れないよう砂粒・岩石片をまぜることもあります。つぎに紐づくりという方法で土器を底の方から作っていきます。この方法は粘土の紐かこれを押しつぶして平にした粘土の帯を積み上げていくものです。大体の形ができると仕上げとしていろいろな作業が加えられます。口のあたりを指や皮などでなでて、なめらかに仕上げる作業、竹のへらなどで削りみがく作業、また割り板の木目を利用しなでる作業などです。最後に平らな地面や凹んだ場所に土器・焚木を積み上げて600度から800度ぐらいの温度で焼成しました。



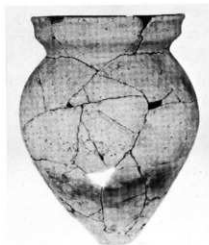
甕形土器（弥生時代中期）
上2点は8号住居から出土しました。



壺形土器（弥生時代後期）
10号住居跡より出土



甕形土器（弥生時代後期）
10号住居跡より出土。



甕形土器（弥生時代後期）



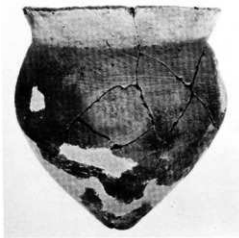
甕形土器（弥生時代後期）
4号住居跡より出土。



甕形土器（弥生時代後期）



甕形土器（弥生時代後期）
7号住居跡より出土。



甕形土器（弥生時代後期）
14号住居跡より出土。



台付裝飾壺 (弥生時代後期)



小形壺形土器 (弥生時代後期)



鉢形土器 (弥生時代後期)
10号住居跡より出土



小形壺形土器 (弥生時代後期)
7号住居跡より出土



鉢形土器 (弥生時代後期)
11号住居跡より出土



台付鉢形土器 (弥生時代後期)
7号住居跡より出土



鉢形土器 (弥生時代後期)
14号住居跡より出土



鉢形土器 (弥生時代後期)
12号住居跡より出土



鉢形土器（弥生時代後期）

7号住居跡より出土



高環形土器（弥生時代後期）



器台形土器（弥生時代後期）

この上に鉢形土器などを置き使った
ものでしょう。



高環形土器（弥生時代後期）

7号住居跡より出土

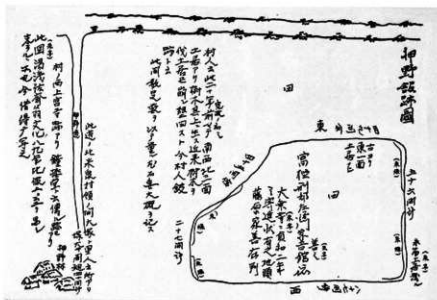
弥生時代について

弥生時代は今から約2300年前から約1700年前までの約600年間です。朝鮮半島から稲作（現在と同じ米を食べること）が伝わり人々の生活が大きく変わりました。前時代の縄文時代の人々は食物のかんたんな栽培は知っていたようですが、ほとんどの食べ物は自然のめぐみに頼っていました。ドングリ、トチなどの実やイモ類、またイノシシ、シカやサカナなどの生き物を捕えて生活していました。稲作や新しく伝わった鉄の道具などにより弥生時代の人々は縄文時代の人々とは比べものにならないほど安定した生活を営んでいました。稲の栽培はもちろん麦や粟などを植えることなど、自然を少しずつ自分たちの有利になるように変えていく知識を備えていたことによるものです。一方では貧富のちがいがにより支配する人、される人ができはじめたり、稲作のため、土地争いや水争いが起き村と村が争ったりもしていました。

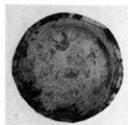
弥生時代は今日の私たちと同様な生活を営みはじめた最初の時代と言えるでしょう。

「押野殿」の館跡

「押野殿」の館跡については、少量の土器と溝跡が見つっています。この溝跡は巾が約5mと大きいことと、このころの館は防ぎよのためまわりに土居と掘をめぐらせていたことから、「押野殿」の館のまわりにめぐらした堀（濠）と考えられます。この堀が南北160mはなれて見つかり、古地図の西側に書かれた87間（約158m）とほぼ一致することや、調査区の東側においては、約90mはなれて堀と思われる落ち込みが見つかり、これも古地図の東側に書かれている49間（約89m）と一致することから、「押野殿」の館跡は遺跡分布図に示すような範囲と思われる。おおよその場所は古地図等によりわかっていたのですが、このように館跡の範囲をほぼ限定できたことは重大な成果と言えましょう。図中には押野館跡の大きさのほかに、大乗寺に貞和二年(1346年)の富樫家善からの寄進状（寄付をいたしますとの文書）があることや、館跡内の木を伐り土居を壊して田地にしたこと、大塚古墳、上宮寺のことなどが書かれています。



押野館跡図（押野村史より）



上3点土師質土器（皿）右 珠洲焼 裏口縁
14世紀後半頃のものと思われる。

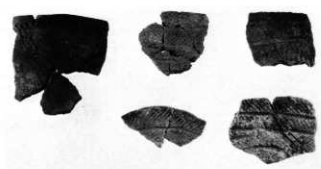




大塚遺跡近景
(昭和56年当時)

大塚遺跡

大塚遺跡は弥生時代の後期を中心とする遺跡ですが、古くは縄文時代の後期中頃(約3500年前)に人々が住み着いていたことがわかりました。土器と火を焚いた炉跡が見つかっています。炉は約50cmの円形に石を並べてありました。また縄文時代晩期後半の土器も数点出土しています。



縄文式土器

深鉢形土器の口縁部の土器片で
縄文時代後期中頃のもです。



縄文式土器

小形の鉢で縄文時代晩期
の土器です。



打製石斧



敲石

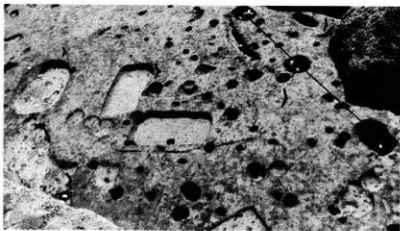
表面がくぼんでいる
ことから凹石と
もいわれる。木の
実などをつぶした
道具でしょう。



発掘調査風景(昭和56年)

弥生時代の後期にはタチナカ遺跡と同じく村が営まれており、掘立柱建物跡、土坑、溝跡などが見つかっています。発掘面積が小さく遺跡のごく一部ですが、調査個所は村の北東側と思われ、南側が中心部と思われます。

大塚古墳についてはこの付近にあったことは確かですが、現在まだ古墳の場所はわかっていません。



大塚遺跡調査区近景

右上に線で示した3個の穴は掘立柱建物の柱穴です。右側は未調査ですが、梁間1間、桁行2間の建物でしょう。



土塚墓

河原石や土器が埋まっています。



砥石

鉄製の道具を砥いだものです。

以上がタチナカ遺跡・大塚遺跡のあらましです。これまでの調査の結果より、簡単に歴史をながめてみましょう。縄文時代後期中頃、大塚付近に人々が住みつきました。御経塚遺跡とはほぼ同じ頃で、現在野々市町内においては最も古い時期です。この後タチナカにも人々が住みはじめました。一時人々の移動により2つの村はなくなりましたが、弥生時代中期にはタチナカで村が再びつくれ、後期になると人口も増へ最も大きな村に成長したと思われます。大塚でも新たに村が生まれています。古墳時代にはいると後期には大塚古墳がつくれ、有力な豪族が付近の村々を支配していたことでしょう。

奈良・平安・鎌倉時代についてはわかっていませんが、南北朝時代後半(西暦1300年代の後半)には、タチナカに「押野殿」の館が建っており、領主として農民を支配していました。

わからない時代もありますが、人々は原始よりこの地においてたくましく生きてきたことがうかがわれます。

埋蔵文化財について

遺跡や遺物（土器・石器）などの埋蔵文化財は、地中などにうもれている貴重な歴史資料です。これらは、それぞれの時代に生きた人々がつくり出し、残された大切な文化遺産であり、「歴史」「文化」を解き明かすためには欠くことのできない私達全体の財産です。

近年まで、遺跡の多くは自然環境とともに保存されてきましたが、最近の著しい開発の波により自然とともに壊される危険にさらされており、人知れず、失なわれていった遺跡が数多くあることと思われます。

現在の私達の生活は、過去における人々の歴史の積み重ねの上にあります。歴史の意味は、将来の私達の発展にとってとても大切なことであり、埋蔵文化財の価値を十分理解し、ひとりひとりの積極的な働きによって守り伝えてゆかねばなりません。

このように埋蔵文化財はその重要性から「文化財保護法」という国の法律で守られています。このため遺跡は勝手に発掘することはできません。遺跡の土地が自分の所有地でもこの法律の適用を受け、発掘するときは文化庁長官へ届出しなければなりません。

現在、発掘調査や文化財関係の仕事は地方公共団体における教育委員会が中心となって行なっています。これに関する情報や相談については教育委員会へ連絡して下さい。

地権者の方々へ

所有される土地に遺跡があることはとても「やっかいだ」また「迷惑だ」と思われるかもしれません。しかし、遺跡は私達の祖先がどのように生活していたかを知るうえで唯一つのものと言えます。押野地域の遺跡を調べることにより、遠く先人達の生活を知ることができ、またこれを手がかりとして、北陸地方や日本全土の様子を知ることができます。結果によってはいつ教科書の内容が変わるような大発見があるとも限りません。学術的にも貴重なものが秘められていると思われます。

タチナカ遺跡、大塚遺跡地内は市街化のため土地区画整理事業がほぼ完成しています。今後、住宅が建ったりビルが建ったりしますと調査が不可能となり、将来ずっと私達祖先の生活がわからずじまいになってしまいます。このため教育委員会では、遺跡地内の開発に際しては事前に緊急発掘調査を行ない、記録として残し永久に保存しています。

今後、地権者の方々において、遺跡地内及びこの付近で住宅建築など開発される計画がある場合は町教育委員会まで連絡をお願いいたします。

遺跡の重要性を理解いただき、今後のご協力を重ねてお願いいたします。

あとがき

野々市町には、国指定史跡の御経塚遺跡、末松庵寺跡をはじめ押野タチナカ遺跡、大塚遺跡など多くの遺跡が存在しており、遺跡密度が高い地域のひとつです。

押野町の土地区画整理事業により発見された両遺跡は、今から約1700～1800年まえの弥生時代の後期を中心とする集落跡です。

本書は、押野タチナカ遺跡・押野大塚遺跡が発掘調査された、昭和55年～59年までの調査分の概要をとりまとめたものです。

先人の残した貴重な文化遺産の一つである埋蔵文化財は、私たちの郷土の歴史を知るうえでかけがえのないものであります。

御高覧をいただき埋蔵文化財のより深いご理解とご協力をお願い申し上げます。

昭和61年3月

野々市町教育委員会

野々市町

押野タチナカ遺跡

押野大塚遺跡

発行 昭和61年3月

編集 石川県野々市町教育委員会

発行者

印刷者 北国書籍印刷株式会社

